「障がいがあっても働ける～就労者インタビュー～」動画シナリオ

【導入】

メインタイトル：高次脳機能障がいの支援の流れ

サブタイトル：第４回　障がいがあっても働ける～就労者インタビュー～

医師：健和会病院 リハビリテーション科 医師の〇〇です。

当院は、高次脳機能障害拠点病院として、高次脳機能障害がある方の運転再開支援や復職支援に取り組んでいます。

今回の動画では、当院の回復期リハビリテーション病棟に入院され、退院後復職に至った２名の方について、インタビュー形式で当時と現在の思いや実際の仕事の様子をご紹介します。

【インタビュー①】

作業療法士（インタビュアー）以下 OT：１人目は、ご実家の家業の手伝いをされている A さんです。

A 氏：宜しくお願いします。

OT：A さんについて、簡単にご紹介します。

脳出血の影響により、注意、記憶、遂行機能の低下がみられました。また、右同名半盲という右側の視野が見えにくい症状もありました。目の見えにくさは、生活をしていくうちに慣れることができ、ご自分でも気を付けて生活ができるようになっていました。

A さんは今回の入院の前にも脳出血をされています。ですが、以前の入院の時には、高次脳機能障害ということはあまり伝えられていないとのことでした。

それでは、入院当時の様子について質問していきたいと思います。

A さんにとっては今までに経験をされなかったほどの少し長めの入院だったかと思いますが、いかがでしたか？

A 氏：入院は嫌だった。

OT：急性期病院から当院の回復期病棟に転院することを、A さん自身はよく思われていなかったと聞きました。ですが、主治医からの説明や奥様と話をして転院を決められたそうですね。

A 氏：ずっと「なんで入院しないといけないんだ」と思ってた。とにかく、はやく帰りたかったね。

OT：確かに、入院当初から、「帰りたい」と言われていましたね。一定期間しっかりと入院してリハビリに取り組んでもらうためにも、入院当日に入院についての説明し同意書にもサインをして了承をもらいましたね。

頭のはたらきを具体的に知るためにも、高次脳機能検査も色々とおこなってもらいました。検査についてはどうでしたか？

A 氏：初めは先生も信用できなかったし、なんでやるのか分からなかった。

OT：入院中に、色々と話をさせてもらいましたが、「信用されていないのかな」と僕も感じてはいましたよ。それでも、高次脳機能障害についての説明もさせてもらい、今回の入院を良い機会と捉えて、ご自分の体や頭のことを知ってもらおうという気持ちでした。だんだんと入院生活にも慣れてこられてご自身のことも話してくれましたね。

ご自身の頭の働きについて、どう感じていましたか？

A 氏：正直よくわからない。

OT：奥様にも伺いましたが、入院以前にも集中しにくかったり、時に一つにこだわるような様子もみられていたそうですね。また、怒りっぽい口調になることもあったようですね。

A 氏：そうだね。

OT：ですが、脳の影響によるものという説明はされていなかったということですもんね。僕が、脳の働きについて説明したり、頭の訓練をしてもらうことで気持ちの変化はありましたか？

A 氏：言葉が上手く話せなかったり、字が上手く読めなかったり。これが障害なんだなって思った。

OT：新しいことを覚えたり、同時に考えたりすることが苦手でしたね。例えば、話していても話をした内容を忘れてしまったり、会話中に何の話をしていたかわからなくなることもありましたね。

困らないために、あらかじめ伝える内容をメモをしておいて振り返りながら話をしたり、会話で話している内容がわからなくなったら、何を話せばいいのかを相手に聞き直すなど、気を付けてもらいました。

A 氏：よくわからなくなるから、聞く様にしている。

OT：話の内容を忘れて、よく話が横道に逸れてしまうことがありましたね。それはそれで面白い話も聞けましたが。記憶に関して、全てが忘れやすいというわけではなく、昔から得意だったオセロなどは強かったですよね。

A 氏：(OT の名前)先生にも勝ったからね。

OT：確かに完敗でした。

記憶の特徴として、短期記憶と呼ばれる新しいことを覚えることや、作業記憶と呼ばれる同時進行で覚えていくようなことは苦手でした。ですが、その場の判断はできていましたし、既に長年の経験で身についた記憶は保持されていたので、元々持っていた戦略を十分に発揮できていましたね。

では、お仕事についても伺っていきたいと思います。

まずは、ご実家とうまく取り持ってくれている奥様ですが、奥様にも高次脳機能障害について説明をさせて頂きました。検査をして会話などで苦手だったことは、入院前からも奥様は伝え方やメモの取り方などを工夫してくださっていましたね。

A 氏：そうだね。色々ありがたいと思ってる。

OT：新型コロナウイルスに対する感染対策もあって、外出での訓練が難しい状況もありました。その中で、奥様には病院とご実家の橋渡しもしてもらいました。

家業で使う道具を持ってきてもらって実際に練習もしてもらいました。入院中に道具を久しぶりに使った練習を行いましたが、そのときはうまくできましたか？

A 氏：しっかりできるか心配だったけど、前と変わらなかったから良かったよ。

OT：長年されていたものなので、頭も体も覚えていましたね。現在は、以前よりも頻度が少なくなっているようですが、家族の方とも相談しながらお仕事をされていると伺いました。

新型コロナウイルスの現状もあるため、色々と出歩くことは少なくなったようですが、これからも気を付けて過ごしてください。

これで A さんのインタビューを終わりにします。色々と話を聞かせてもらい、ありがとうございました。

A 氏：ありがとうございました。

【インタビュー②】

OT(インタビュアー)：2 人目は建設業で働く傍ら、秋には稲作の仕事もされている B さんです。

B 氏：宜しくお願いします。

OT：B さんについて、僕から簡単に紹介します。

業務中の転落事故の影響により、記憶力、遂行機能の低下がありました。入院中には、様々な高次脳機能障害の評価、運転に向けての訓練、記憶・遂行機能の訓練として作品づくりをおこなってもらいました。退院時には、運転も再開でき、現在では元々の仕事に戻られて働かれています。

それでは、入院当時の様子を伺っていきたいと思います。

入院中に仕事に戻るためにも運転のためにも高次脳機能の検査を色々と実施してもらいましたが、実際おこなってみていかがでしたか？

B 氏：テストは嫌だった。特に覚える検査は苦労したね。

関係のない 2 つの言葉を覚えるのは全然覚えられなかった。関係のある言葉は覚えられたけど。

OT：そのような記憶の検査もやってもらいましたね。検査は集中してできていましたが、聞いたものを覚える検査は特に苦戦されていましたね。検査中にも「大変だけど、やらんとしょうないな」と頑張っておられました。

B 氏：今までやってこんかったから、頭がおかしくなるな。

OT：学校を卒業して仕事が始まると長時間座ってテストに取り組むなんてことはないですからね。

今回の入院では、仕事復帰と運転という目標があったため、一通りの検査を受けてもらって詳しく頭のはたらきについて説明をさせてもらいました。特に記憶については脳の機能としても低下がみられたため、どう工夫すれば困らないのかを一緒に考えてもらいました。例えば、メモを使用して、リハビリの準備を忘れないようにしてもらったり、入院中にも仕事を依頼したり伝言を伝えてもらったりと、あらゆる場面でメモをとってもらい困らないように意識してもらいました。始めは午前中にお伝えしたことを午後に聞くと忘れてしまっていることもありましたが、書くことを普段から習慣づけてもらい、覚えるコツがわかってからはしっかりと覚えておられ、退院頃にはメモがなくても思い出すこともできていましたね。

入院中の訓練では、記憶や順序立てて物事を考えることが苦手だったので、そこに焦点を当てた課題を実施してもらいました。木工の作業を実施してもらい、道具の管理や工程計画、振り返りなど完成期日に気を付けて作成してもらいました。

B 氏：彫刻刀で彫ったり、何回も色付けをしたりしたから時間がかかったかな。でも楽しかったよ。

OT：色々とこだわって作ってくださったので、時間はかかってしまいましたね。でも、その都度作業工程を見直したり、報告してくださりしながら仕上げてもらいましたね。絵もお上手で細かな作業や仕上げも丁寧だったので、僕も大変勉強になりました。

入院中は、空いた時間に運動の自主トレだけでなく、計算や脳トレなども自主トレとしてしっかりとやってもらいましたね。

B 氏：計算なんて長いことやっていなかったから、大変だったよ。初めは凡ミスが多かった。前の式や答えに引っ張られて間違えていることが多かったかな。

仕事に戻るための体づくりのリハビリのほうが疲れたけど、楽しかったね。

OT：計算では、初めの頃は前の式の数字や符号が頭に残ってしまって、次の問題を間違えてしまうことがありました。繰り返しおこなってもらうことで思考の切り替えがお上手になられて、正答が増えていました。同時期に入院されていた他の方とも声を掛け合いながら、運動も頭の自主トレもしっかりと取り組まれていたことは印象的でした。

入院中には自動車学校で車の運転をしたり、職場訪問で実際に重機を操縦してもらいました。仕事に復帰した時に入院以前と比べて「上手くできないな」とか違和感はありましたか？

B 氏：元々、やっていたことだから体が覚えていてやれたかな。入院中に確認できたから、退院して実際にやる時にも困らなかったよ。仕事をしても体の痛みやだるさはないよ。年とともに体力は落ちて、前のようには動けないけど。

OT：長年されていた運転や仕事の動作は手続き記憶といいますが、今回の受傷での影響は少なかったため、実際に運転や操縦をした際にもスムーズに行うことができて、僕も安心しました。また、入院中に確認したことで少しでも退院後の自信に繋がったのならよかったです。現在も痛みを出さずにお仕事が続けられているのであれば嬉しいです。

これで B さんのインタビューを終わります。ありがとうございました。

B 氏：ありがとうございました。

OT：それでは、現在の B さんの仕事の様子をご紹介します。

（B さんが業務されている映像についての説明）

【まとめ】

医師：高次脳機能障害は、目で見ただけではわかりにくい障害です。

本人は問題に感じていなかったり、問題と感じていても「なんでできないのか」「どうしたらいいのか」と、ご自身でも対処に困ることがあります。また、周りの方からは「どこが悪いのか」と思われやすい　です。自宅生活や普通に接するだけではわかりにくく、社会に出て初めて問題となることもしばしばあります。

そうならないようにするためにも、入院中に適切な検査と説明を受け、理解し、準備を行うことが重要となります。高次脳機能障害は、理解し対策・工夫を行うことで、できなかったことができるようにもなります。今回ご紹介したお 2 人のように、適切な対応がなされることで復職も可能となってきます。

地域・社会で生活していくためには、本人の努力だけでなく、周りの方の理解と支援も必要となります。こまったことがあれば、高次脳機能障害拠点病院へご相談ください。